

はり みず う たき いし がき 漲水御嶽と石垣



はり みず う たき いし がき
漲水御嶽は「ツカサヤー」とも呼ばれ、宮古創世神話や人蛇婚
説話などにいろいろられており、古代の宮古の人々の源流をさぐ
る上からも貴重な御嶽です。南側の石垣は、1500(弘治13)年
に、仲宗根豊見親が中山王府の先導で八重山のオヤケ赤蜂征討
に向かう際、勝利することができたら神
域を整備、奉納すると約束し、見事勝利
したために築られました。当時の石造技
術を知る上でも貴重な石垣です。



そう せい しん わ 宮古創世神話

まだ島の形がなかった太古の昔、弥
久美神が天帝から授かった天岩戸の柱
の端を大海原に投げ入れてできたのが
宮古でした。天帝は次に赤土を下ろ
し、古意角神に「下界に降りて人の世
を創り、守護神となれ」と命じ、玉の
ように輝く女神の姑依玉と共に行くこ
とを認めました。古意角・姑依玉の両
神は、多くの神々を連れて地上に降
り、漲水御嶽の東側にあった漲水天久
崎という岬に居を構え、様々なものを
生み出し、神の心を映し出した楽しい
人の世を創りました。その頃、島は赤
土ばかりだったため、天帝は次に黒土
を下ろし、こうして作物がよく実るよ
うになりました。そしてふたりの間に
宗達・嘉玉の男児と女児が生まれ、ふ
たりが大きくなった頃、天帝は紅葉を
身にまとった木装神という男神、青草
を身にまとった草装神という女神を下
ろしました。そしてそれぞれ宗達・嘉
玉と夫婦となり、東・西に住み、これ
が現在の東仲宗根・西仲宗根だといわ
れています。宗達夫婦は世直真主とい
う男児を、嘉玉夫婦は素意麻娘司とい
う女児を産み、後にこの二神が夫婦と
なり、子孫繁栄し、宮古島民の祖と
なったといわれています。

じん だ こん せつ わ 人蛇婚説話

昔、平良の住屋の里に、身分も高く富
に栄えた夫婦がいました。子がいな
かったので神に祈ったところ、娘を授
かりました。その娘が14、5才の頃に
妊娠したので、驚いた両親が尋ねると、
「誰か分からない白く清らかな若者が
毎晩忍び入ってきて、夢心地で夜を重
ねるうちにこの体になった」と言うの
で、両親は不審に思い、糸の先に針をつ
けて男の髪に刺すように言い、娘はそ
のとおりになりました。夜が明け、糸を手
繰って行くと、漲水御嶽の洞の中に首
に針を刺された大蛇がいました。両親
は驚き悲しみましたが、その夜、娘の夢
にその若者が現れ、「私はこの島を創っ
た神、恋角の化身である。島を守る神を
創ろうと、あなたに思いを寄せた。必ず
3人の子を生む。3才になったら漲水
へ連れてくるように」と語りました。そ
の夢の通り、3人の娘が生まれ、3才の
ときに言われた通り連れて行くと、御
嶽の中から恐ろしい形相の大蛇が出
てきました。母は驚き逃げようとしま
したが、娘たちは大蛇に飛びつき、ひと
りは首に、ひとりは腰に、ひとりは尾に
抱きつき、御嶽の中へ消えていきまし
た。その夜、大蛇は光を放って天に昇
り、娘たちは島の守護神になりました。

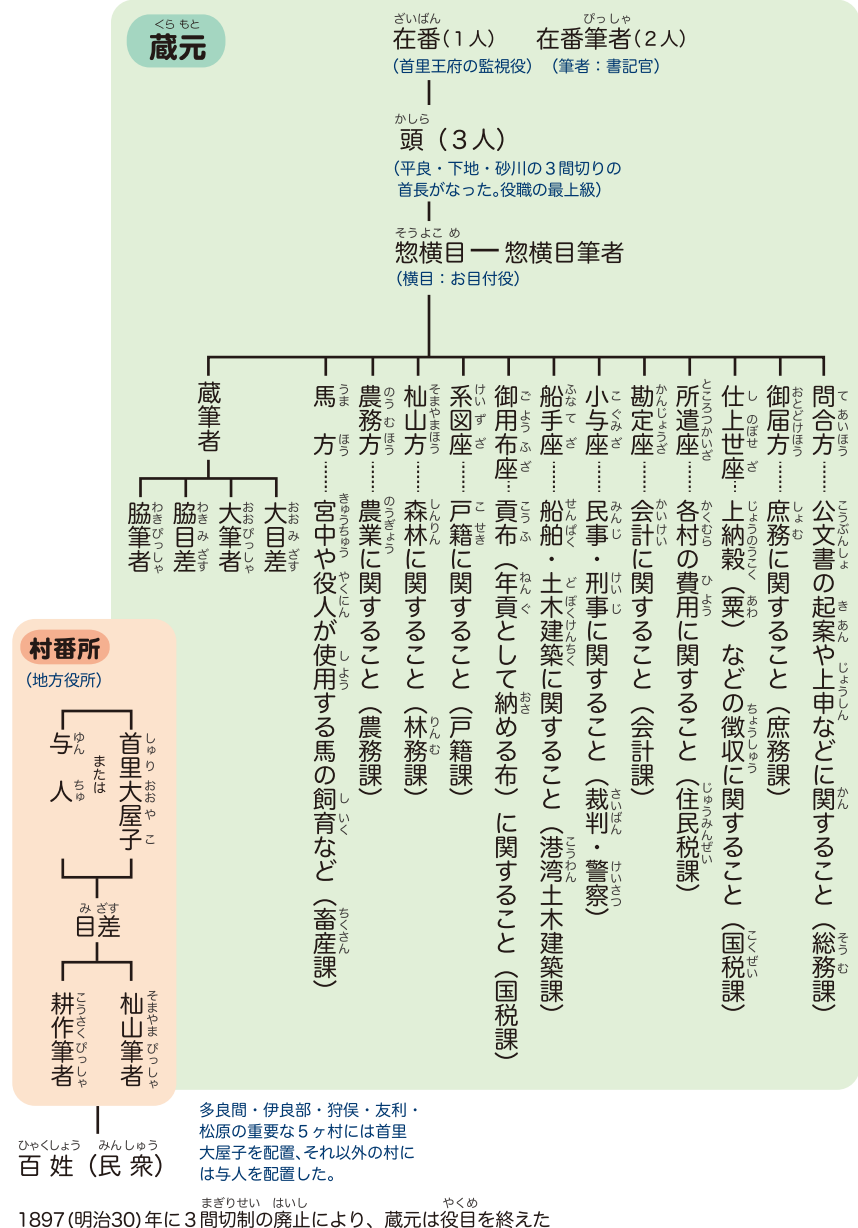
蔵元跡



16世紀初期に仲宗根豊見親が開設した蔵元は、当時の行政庁にあたります。主に首里王府に納める年貢を取り扱っていました。当初は茅葺きでしたが、1682(康熙21)年に火事で焼失しました。1685年に瓦葺きに建て替えられ、行政機能も拡充整備されていきました。1868(同治6)年に改築され、堅牢な石垣廊と楼門に囲われた広大な庁舎となりました。1902(明治35年)に宮古島庁と改称され、元在番東仮屋を改築し、移転しました。その後、建物は1921(大正10)年に火事で焼失し、石垣なども漲水港の埋め立て工事に使われ、蔵元の痕跡は完全に消失しました。



蔵元・村番所の構図

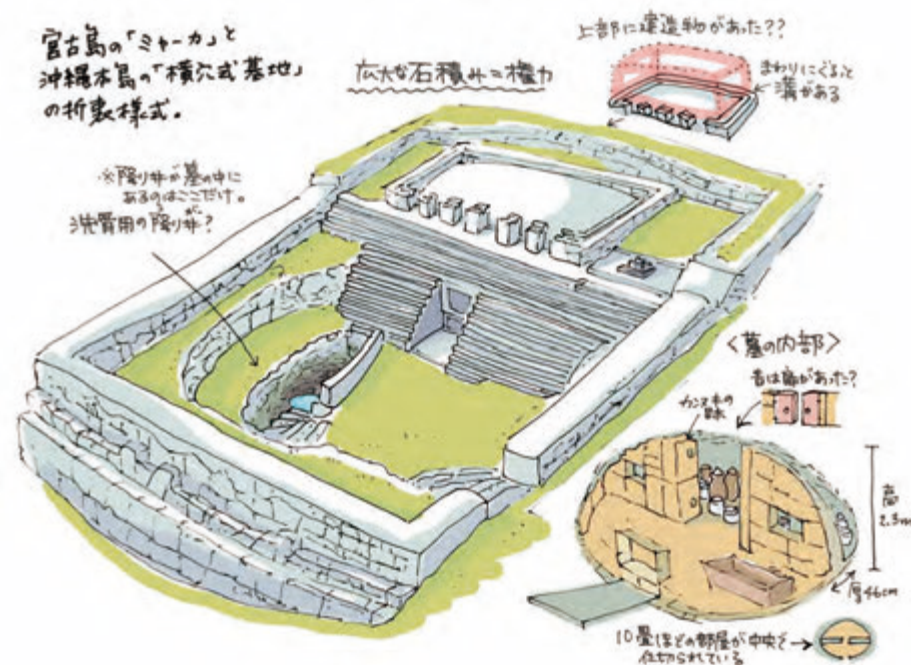


『みやこの歴史』宮古島市史第一巻通史編(2012)より

とうゆみや ばか なか そ ね とうゆみや はか
豊見親墓 (仲宗根豊見親の墓)

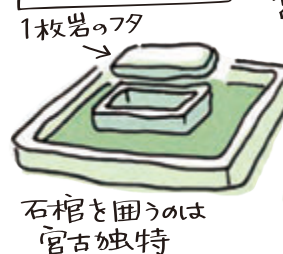


15世紀末から16世紀初頭にかけて宮古の支配者として君臨した仲宗根豊見親が、父、真誓の子豊見親の霊を弔うために築造したと伝えられています。宮古在来の“ミャーカ”と、沖縄島の横穴式墓地の折衷様式で、沖縄島と宮古の文化の交流を裏づける代表的な墳墓です。墓は墓室の四方を石垣で囲って西側に出入り口を設け、庭の北隅には小さな降り井を設けてあります。また、墓室の前面には13段の階段が施され、墓室の上部四方には大きな石柱が立てられています。



よこ あな しき ぼ ち
ミャーカと横穴式墓

ミャーカ(平地式)



宮古に古くからある風葬墓。

西欧地中海に残るドルメンの一種とも紹介される

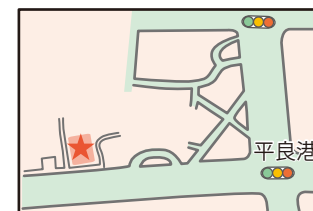


横穴式墓

自然の洞窟や岸壁などを掘り込んだ墓



ミャーカは宮古に古くからある風葬墓地です。巨大な石で囲い、天井も大きな石で蓋をします。西欧地中海沿岸に残っているドルメンの一種としても紹介されます。横穴式墓は、自然の洞窟や岸壁などを掘り込んだ墓をさし、沖縄島によく見られる亀甲墓が代表的です。



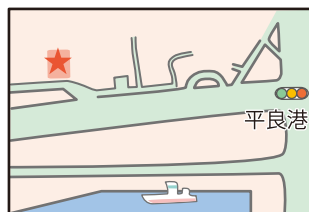
豊見親墓 (知利真良豊見親の墓)



ツンパン (ヒンパン)
門の内側の仕切り屏。外
からの目かくしや、魔除
けの意味をもつ。



この墓は1750(乾隆15)年頃、平良の頭、宮金氏寛富が築造したと伝えられています。仲宗根豊見親の墓とともに“ミャーカ”と横穴式の折衷様式を示す代表的な墓です。また、ツンパンの跡が残り、“ツンパン墓”とも呼ばれています。宮金氏寛富は1745～1762(乾隆10～27)年まで平良の頭職を務め、杣山惣主取として大野山林の造林をはかるとともに、瓦の製造を始めたとも伝えられています。知利真良豊見親は、仲宗根豊見親の三男で宮金氏の元祖です。1500(弘治13)年、父と八重山のオヤケ赤蜂征討軍に加わり、その後、次兄祭金豊見親が4年在勤したあとを受けて八重山の頭職となり、かの地で没したと伝えられています。

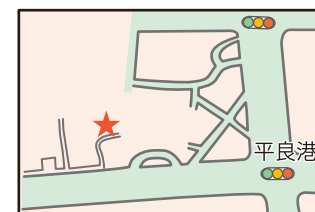


豊見親墓 (あとんま墓)



忠導氏にゆかりのある墓で、同氏族のあとんま(後妻)だけを葬ったことから、俗に“あとんま墓”と呼ばれています。

墓は岩盤を掘り込み、切石と組み合わせた墓で、いつ建造されたかは明らかになっていません。忠導氏は16世紀初頭に宮古の支配者として君臨した仲宗根豊見親を元祖に、数多くの頭職を出し、勢力を誇った系統です。その勢力・財力を背景に、宮古の風習として本妻と同じ墓に葬ることのできなかったあとんまの墓を設け、その霊を弔ったものと思われれます。



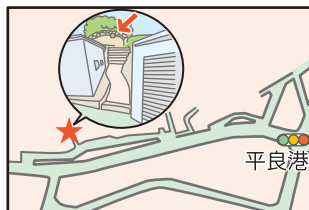
恩河里之子親雲上の墓碑



「支流長真氏恩河仁也、乾隆年間卒向姓恩
河里之子親雲上墓 同治11年壬申在番同氏花
城親雲上」と刻まれており、下の方には
蓮弁の絵模様が描かれている。墓碑に絵模
様を描くのは、死者の極楽往生を願う仏教
の思想で、沖縄島あたりでは、ほかに日輪
や唐草模様などがよく用いられている。



この墓碑は旧藩末期に建てられ、現存する墓碑では比較的
古く、砂岩で造られています。恩河里之子親雲上の墓碑を建
てた花城親雲上は、1872(同治11)年に首里王府から派遣され
た在番で、1874年に病で亡くなりました。彼の任期中、平良
の頭、忠導氏玄安ら54名が犠牲となった「台湾遭害事件」や
「ドイツ商船口ベルトソン号宮国村沖遭難事件」が起き、ま
た「琉球国が琉球藩」となりました。これらの事件と墓碑に
関わりはありませんが、花城親雲上が
宮古に赴任してきたことの証拠であ
り、近世末期に起きた事件などを彷彿
させる貴重な金石文です。



真玉御嶽

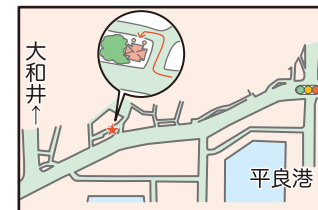


平良の海岸端、通称「パスタナカ」広場の南方にあります。『御
嶽由来記(1705)』には「祭神 男神金殿・女神まつめが」「諸願に
つき平良4か村崇敬す」と記されています。

真玉御嶽の由来

昔、真玉の地に金殿とまつめがとい
う貧しい夫婦がいました。ふたりは正
直者で神様を大事にしたので、次第に
子孫繁昌し、贅沢ができるようになり
ました。それでもますます良い行いを
し、長生きをしたので、人々は夫婦の骨

を真玉山に葬り、神として祀りました。
この嘉例(縁起)にあやかるため、子孫
繁昌の神として崇敬されています。



ぶばかり石 (人頭税石)



ひら ら あざ に か どり うみ ぎわ
平良字荷川取の海際に、
ひと せ たけ せきちゆう た
人の背丈ほどの石柱が立っ
ています。地元では「ぶばかり
石 (賦計り石)」と呼び、
「この石より身長が高く
なったら人頭税を課せられ
た」と伝わっています。石柱
は柳田國男著『海南小記

(1925)』の中でも紹介され、全国に知られるようになりました。

宮古の近世は、数え 15 才～ 50 才までの男女に税が課され、
男は粟、女は布を納めました。それは苛酷な税制で、役人による
税の取り立てに、人々は長年苦しめられたといえます。

税制に身長は関係なく、この石と史実
は異なるようですが、人頭税による生活
の苦しみをこの石に託して語り伝えて
きた人々の思いが込められた石柱です。



人頭税の歴史

1637(崇禎10)年、琉球王府は先
島(宮古・八重山諸島)に人頭税制を
施行しました。この税制は頭数(人
口)を基準に粟や織物を税として割
り当てたもので、役人の見立てによ
り税を納めさせられました。1659
(順治13)年には、頭数の増減に関係
なく一定の税を納める「定額人頭
税」制となり、更に、1710(康熙
49)年には15才～50才の年齢が基
準とされました。

女性が織った御用布は島の税の3
分の2を占め、また薩摩上布として
大阪で高値で取引されていたため、
天候不順で飢饉に見舞われたときで
も滞納は許されず、実質的に強制労
働に近いものでした。また、税を確
実に納める手段として、各村に「五
人組」という制度が設けられ、その
組の誰かが年貢を納められなかった
場合、その組で責任を持たされ、ま
た、五人組が納められない場合は村
が、村が納められない場合は島全体
でまかなうという、連帯責任のシス
テムが取られました。

1888(明治21)年の大飢饉を機に
人頭税の廃止が訴え始められ、

1893(明治26)年、代表団が上京し
て請願書を国会に提出しました。そ
の請願書には農民の生活が次のよう
に記されています。

『島民はさつま芋を常食とし、大
半の島民は粟の味を知らず。味噌を
持っている者は全島民の4分の1で
他の皆は海水に水を足して芋の葉や
蔓、海藻などを煮て食べている。醬
油などは口にすることは無い。衣服
は夏は芭蕉布1枚、冬は破れた木綿
の着物を1枚上に着るのみ。ひどい
ところは1、2枚の夏着を家族で代
わる代わる着ている。建物も丸太の
上に草で屋根を葺き、茅を編んで四
面を囲っているだけで、大半は土間
で、席を敷くのは稀である。家も非
常に小さく、要するに本州の乞食を
彷彿とさせる(一部要約)』

こうした廃止運動が実り、1903
年(明治36年)1月1日の新税法施
行に伴い、260年余にわたる人頭税
は廃止されました。

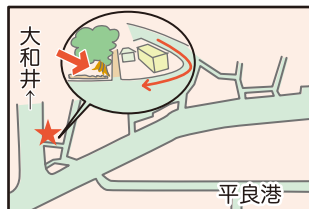
湧川まさりゃ御嶽



この御嶽は、宮古の竜宮伝説を伝える貴重な御嶽です。

ガジュマルとクロツグ、フクギが生い茂り、昔は古い壺が祀られていましたが、いつのまにかなくなってしまいました。2018（平成 30）年に地主の土地活用によって駐車場の一角に配置されています。

近くに海へ流れ出る水の湧き口があったことが、御嶽の名前の由来であるとも伝わっています。



昔、荷川取村に湧川まさりゃという漁師がいました。ある日、漁に出てエイを釣ると、そのエイがたちまち美しい女性に変わりました。まさりゃは一目惚れして夫婦の契りを結びますが、女は海へ戻って行ってしまいました。

2、3ヶ月たったある日、同じ場所ですりをしていて、2、3歳の3人の子どもがどこからともなく現れ、「母の使いで父を龍宮に案内するために来ました」と言いました。まさりゃは不審に思いましたが、子どもたちがまさりゃの手を取って海に入ったかと思うと、たちまち金銀きらめく楼閣の中にいました。子どもたちの母は以前に契りを結んだ女に間違いなく、親しげな顔でまさりゃを出迎え、三日三晩、酒や料理でもてなしました。別れ際、女は涙を流し、「これをいつまでも私の形見と思って下さい」と瑠璃色の壺を手渡しました。まさりゃは一気に現実に引き戻された気持ちで家に帰ったのですが、龍宮での三日三晩はこの世では3年3ヶ月の月日が過ぎていました。瑠璃壺には神酒が入っており、呑んでも呑んでも酒は尽きる

ことなく口の渇きを癒し、天の甘露のような美味しい酒でした。これを呑んだ者は無病息災で長生きしたため、まさりゃは家宝として秘密にしていたのですが、やがて村中の噂となり、大勢の村人が壺を見ようと家に押しかけて来ました。まさりゃはいつの間にか贅沢な生活に思い上がってわがままになっており、「この酒は朝晩とも同じ味で、もう呑み飽きた」と言いました。そのとたん、壺は白鳥と化して空に舞い上がり、東の宮国村のスカブ屋という家の庭木に留まり、姿を消してしまいました。

『御嶽由来記』より



宮国村のスカブヤー御嶽
白鳥がとまったとされる木が祀られている

ウプムイ^{う たき}御嶽



この御嶽は、荷川取村の御嶽としてヤブ(民間医者)が祀り始めた^{つた}と伝わっています。境内はコンクリートで舗装され、北側に主神マツカマが祀られています。西側に3か所の祭壇があり、「真玉御嶽」、「ツカサヤー(漲水御嶽)」、下地の「赤名宮」などの神々を遙拝(遠くから参拝)する場所となっています。御嶽の周りにガジュマルやクロツグなどが広く茂っていることから、ウプムイ(大森)と名付けられたようです。



カー二里^{ざと う たき}御嶽



この御嶽は、カー二里の守護神が祀られています。中央に30cmほどのイビ(香炉)と、香炉がわりの切り石が置かれ、低い石積みで囲っています。後方にクロツグ、テリハボク、フクギなどの御嶽林が茂っています。以前は御嶽のサス(神女)を中心にさとびとそろき(さんごようじ)おこな(おこな)里人揃って祈願行事を行っていましたが、サスのなり手が途絶えたため、現在は各個人で参拝しているようです。

御嶽は20数mの細い参道が三方向に設けられ、参道の両脇には苔むした低い石垣が続いています。昔、この地に仲宗根豊見親の側室が住んでおり、御嶽の西の門には門番が立ち、3本の道路は緊急時のピンギンツ(逃走路)だったと伝わっています。



やま と がー やま と がー がー うぶ かー
大和井 (大和井・ブトゥラ井・大川)



一般的に降り井は洞窟に石階段を設ける程度で、多くは自然のまま利用されていましたが、大和井は全体にわたって石が積みまれています。下部に大きな石を置き、上部へいくにつれ小さな石に変わり、石も自然の石ではなく切り石を円形に積み上げています。『雍正旧記(1727)』によれば、1720(康熙59)年頃に掘られたと考えられています。大和井は首里王府から派遣された役人や頭などごく一部の役人が使用し、庶民には開放されな

かったといわれています。また、他には見られないかんぬきの跡があり、水守もいたと伝わっています。

対してブトゥラ井は簡素な造りで、一般の住民用として用いられていたものと考えられています。

大川は牛馬専用の井戸で、数多く存在する井泉の中でも牛馬専用のものは珍しく、『雍正旧記』に1717(康熙56)年に補修工事がなされたという記述があることから、

18世紀初頭にはすでに存在

していたことが伺われます。

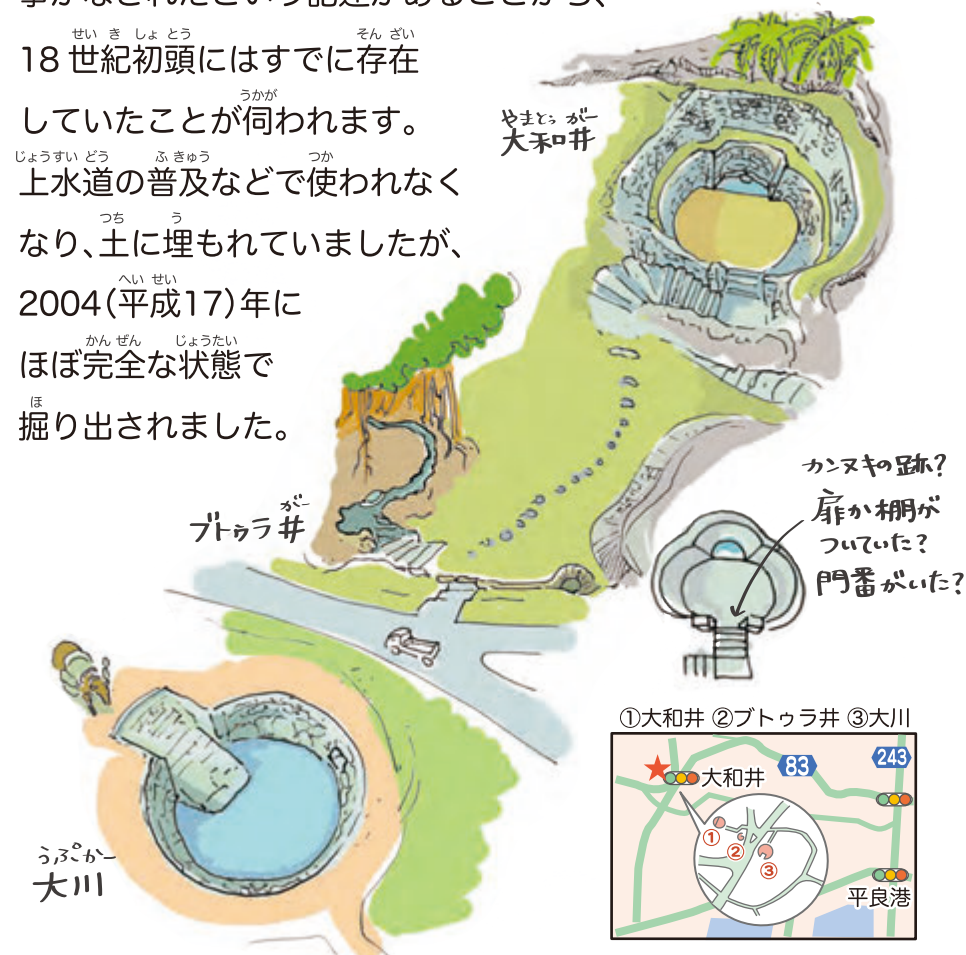
上水道の普及などで使われなく

なり、土に埋もれていましたが、

2004(平成17)年に

ほぼ完全な状態で

掘り出されました。



保里御嶽



この御嶽の周辺は、14世紀前期に保里天太が築いた城跡と伝えられています。神域には入り口からフクギ、ガジュマルなどの古木がそびえ立っています。古木の周辺には神域を囲った石積みの跡が残っています。入り口から30mほど入ったところにイビ(香炉)があり、中央には「テダノ主神」、その左右に「水の神」「トビトリノ神」と記されています。



保里天太とふたりの息子

保里天太には保久利屋盛と居士佐加利というふたりの息子がいました。兄の保久利屋盛は怠け者で才能がなく、弟の居士佐加利は見目もうるわしく、器量もよく、兵法の達人でした。保里天太は、才能のない兄ではなく弟に家督を継がせようと考えていましたが、兄は弟の臣下になることは末代までの汚名だと、ある日、城下の父老たちを集め、「お前たちの娘らは、ブトゥウ井に水汲みに行く途中で私の弟に強姦されようとしている。父もまた騙されて弟に家督を譲ろうとしている。弟が天太になれば、お前たちも苦労するだろう。今、これを戒めなければ将来

必ず悔いを残す」とありもしない話を作り上げて弟を悪く言いました。城下の父老たちはこれ信じ、保久利屋盛の策略に従って居士佐加利を捕らえようとした。ところが、居士佐加利は先にこれに気づき、城から逃げ出し、城辺の箕の隅という山里に隠れ住みました。この相続争いを保里天太が毎日嘆き悲しんでいると、ある日、保久利屋盛は「弟が城辺の箕の隅にいと聞いた。早々に弟のところへ行くがよい」と父を追い出してしまう。保里天太は泣く泣く住みなれた城下を離れますが、城辺に向かう道中につまずいて倒れ、息を引き取ったと伝えられています。

『宮古島記事仕次(1748)』より

ぶち歴史比較年表

※琉球史の慣例により、1372～1878年は中国との朝貢関係を重視して中国年号で表示。

